令嬢はまったりをご所望。3

登場人物紹介

オルヴィアス
エルフの女王の弟で英雄。絶世の美貌の持ち主でとても一途。

セス
セナの弟。ジャッカルの姿を持ち、毛並みは黄緑色。いつも可愛い服を着ている。

チセ
獣人傭兵団の一人。狼の姿を持ち、毛並みは青色。豪胆な一方で、意外にもロマンチスト。

シュナイダー
ローニャの元婚約者。失踪した彼女を捜し出すため奔走中。

リュー
涙からサファイアを生み出すフィーロ族の女の子。

リュセ
獣人傭兵団の一人。チーターの姿を持ち、毛並みは白色。イケメンだけどちょっぴり照れ屋さん。

セナ
獣人傭兵団の一人。ジャッカルの姿を持ち、毛並みは緑色。読書が趣味で、色々なことを知っている。

シゼ
獣人傭兵団のボス。獅子の姿を持ち、毛並みは純黒。普段はクールだが、積極的な一面も。

ロト
蓮華の妖精。お手伝いが得意。

ローニャ
とある小説の世界に、悪役令嬢として転生した少女。婚約破棄をきっかけに、前世からの夢だったまったり生活を手に入れ、田舎街で喫茶店を営んでいる。

序章　❖　エルフの女王と元婚約者。

ローニャの元婚約者――シュナイダーは、頭を抱えていた。

ローニャのことを誤解していた。自らの過ち(あやま)を正し、許しを乞いたい。そう思った彼は、ローニャの祖父ロナードに友人共々追い返されてからも、諦めずにローニャを捜していた。しかし、彼女を見つけられないでいる。

ロナードに、彼女の居場所を教えてほしいと毎日のように頼み込んでも、彼は決して首を縦には振らず、シュナイダーを門前払い。

ローニャと契約している精霊オリフェドートに会いたくとも、許可を得た人間しか彼の森には入れない。

王都を駆け回ってローニャの行方を捜したが、やはり見つからなかった。

それでも彼女の無事をこの目で確認したくて、シュナイダーは苦渋の選択を取ることにした。

同じくローニャを捜しているというエルフの国の王弟オルヴィアスに、心当たりがないか問うことにしたのだ。

ローニャは気付いていなかったが、オルヴィアスはローニャに恋心を抱いていた。
オルヴィアスは直接ローニャにアプローチこそしなかったものの、シュナイダーには敵意を向けてくることが多く、互いにいがみ合う仲だった。
そんなオルヴィアスは、行方をくらましたローニャのことを血眼になって捜しているという。彼はもう、ローニャの行方について何か手がかりを掴んでいるかもしれない。けれど彼を頼ることを、シュナイダーのプライドが躊躇させ続けた。
そのプライドも捨てて、シュナイダーはローニャを見つけるためにエルフの国に足を運んだ。
女王ルナテオーラが治めるガラシア王国。
豊かな緑と、石の建物が並び、穏やかなハープの音色が響き渡る美しい国だ。そんな美しい景色を一望できる壮麗な宮殿で、シュナイダーはルナテオーラと会った。
オルヴィアスに会いたい、と伝えたのだが、通された先にいたのは、彼女だけだった。
「弟は今留守にしています。あなたの用件はわたくしが代わりに聞きましょう」
そう言って迎えてくれたルナテオーラに、シュナイダーは跪いて頭を下げる。
婚約破棄して以来ローニャとは会っておらず、行方を捜していると正直に打ち明け、王弟オルヴィアスがなんらかの情報を持っているのなら教えてほしいと頼んだ。
立派な鹿の角のようなデザインの玉座に腰を下ろしたルナテオーラは、静かにこちらを見下ろしている。そして、微笑みを浮かべて言い放った。

「事を大きくしたくないために、そちらの国王が詳細を伏せているのだと思っていましたが……あらあら、まさかあなたが原因だったとは。実の甥であるあなたがこんな最低な男になっていたなんて、他国の王に言えないのも無理ありませんわ」
最低な男、という部分を強調されて、シュナイダーはギョッとする。
そんなシュナイダーの様子を見つめながら、ルナテオーラは頬杖をついた。
「わたくしは、強く美しい女性の象徴として、国民から憧れの眼差しを向けられる女王。けれどこの国や宮殿の守りは弟と夫に任せていますわ。男性は強さを示すため、何かを守りたがります。そんな男性を信じて見守ってあげるのも、強く美しい女性の役目。しかし、男性を自惚れさせてはいけません。何かを守り抜く強さを与えているのは、紛れもなく女性なのだから」
シュナイダーに向けられる眼差しは、蔑みを含んでいた。
「あなたは自惚れていますわ。ローニャ嬢を愛し、彼女に愛されていたからこそ、あなたは素敵な男性だったのです。思い返せばわかるでしょう？　彼女の支えなくして、今までのあなたがありますか？　彼女への想いなくして、今までのあなたがありますか？　ローニャ嬢と想い合っていたあなたは素敵な男性でしたわ。とてもお似合いでしたから、弟も想いを打ち明けることはなかったのです」
ルナテオーラの言葉に従い、シュナイダーは思い返す。
ローニャに出会ってから、彼女を守るために励んだことは山ほどあった。

彼女を一途に想う気持ち、守りたいという強い気持ち――ローニャの存在そのものが、シュナイダーを支えていた。

「ローニャ嬢が、あなたを素敵な男性にしたのですわ」

ローニャとともにあった時のことを思い出し、胸に熱が込み上げてくるのを感じる。しかし――

「ローニャ嬢の大切さも理解していなかったあなたが、公衆の面前で婚約破棄した挙句、その直後に他の女性になびくなんて、最低ですわね。完全に自惚れていたのでしょう？」

ルナテオーラは容赦なかった。シュナイダーは冷水を浴びせられたような気になる。

「最低な男に成り下がったあなたが、ローニャ嬢に許してもらおうだなんて、どこまで自惚れれば気が済むのかしら。もう元には戻らないのですわ。他の女性の手を取ったあなたを、ローニャ嬢が今でも待ってくれていると思っているわけではないでしょうね？　彼女はそんな惨めな女性ではありません。ローニャ嬢が再びあなたを愛するわけがないですわ」

強い口調で言って、ルナテオーラは悪戯っ子のようににこりと笑った。

「ローニャ嬢と再会なんて、わたくしはさせたくありません」

シュナイダーはあんぐりと口を開けてしまう。

「そもそも、こちらもローニャ嬢の居場所を掴んではおりませんわ。オルヴィアスは、ローニャ嬢と親しくなった思い出の場所でなら会えるかもしないと、今もそこで待っているようですが」

「っ！　それは確か……蓮華草の丘だったはずです。妖精ロトの頼みで彼女が世話を手伝っている、

蓮華の花の丘……そこでオルヴィアス殿下と会ったと聞いたことがあります……」

けれどシュナイダーは、正確な場所までは聞いていなかった。

「あの子は……どうやら、その丘で彼女に想いを打ち明けたいらしいの。思い入れのある場所で告白なんて、素敵だと思いません？」

シュナイダーは顔を引きつらせる。

恋敵がローニャに告白しようとしているなんて、聞いていて気分のいいものではない。

「オルヴィアスは大切な場所を、最低な男に汚されたくないでしょう。たとえわたくしがその場所を知っていても、あなたには教えませんわ」

わずかな望みすら、ルナテオーラは容赦なく取り上げる。

「あなたも、心の底からローニャ嬢に申し訳なく思っているのなら、二度と彼女の前に顔を見せないことです。それが彼女への償いになりますわ。まともな男性に戻るための第一歩と心得てくださいな」

ルナテオーラは、微笑んで優しく告げた。けれどその言葉は、シュナイダーの心をチクチクと突き刺してくる。

とはいえシュナイダーも、半端な気持ちでここへ来たわけではない。厳しいことを言われたからといって、すごすごと引き下がるわけにはいかなかった。

「ルナテオーラ女王陛下。自分はローニャに直接会って――」

「あらまぁ」
めげずに頼み込もうとしたシュナイダーだったが、ルナテオーラはそれを遮った。
「わたくしに食い下がろうなんて、何様のつもりですの？」
うふふ、と口では笑っているが、ルナテオーラの目は笑っていない。威圧的な瞳に、シュナイダーは言葉を失う。
「いつまでかかっている！」
その時、男の鋭い声が響いた。
声のしたほうを振り返ると、そこには白銀の長髪を持つエルフが立っていた。彼はザッとローブを翻し、苛立ちも露わにシュナイダーの横を通り過ぎて、ルナテオーラのほうへ歩いていった。
ルナテオーラの夫、オスティクルス公爵。
彼はオルヴィアスと交代でルナテオーラの護衛を務めている。
シュナイダーは驚愕したまま、その背中を見つめた。
オスティクルスとは面識があったが、彼の声を聞いたのはこれが初めてだった。それほど無口な男なのだ。
「急ぎの予定はなかったはずよね、オスティ」
ニコリと微笑んで、ルナテオーラは明るい声で答えた。オスティクルスは眉間のシワを緩ませることなく、険しい表情のまま彼女に手を差し出す。

「このような下劣な者のために、時間を無駄にするな」
それからオスティクルスはギロリ、とシュナイダーを睨んで言う。
「彼女はこの国の女王だぞ。――身のほど知らずめ」
「あら。おバカさんを罵る暇があるのなら、自分に構ってくれと言いたいのですね？」
「……そんなこと、言っていないぞ」
「仕方ありませんね。次の予定まであなたに構ってあげますわ」
「言っていないと、言っているだろう」
ルナテオーラはオスティクルスをからかいつつ彼の手を取って立ち上がり、腕を絡ませる。オスティクルスはそっぽを向きながらも、彼女の腕を解こうとはしない。
「わたくしも弟も、ローニャ嬢について教えるつもりはありません。お引き取りくださいませ」
最後にそう告げてから、ルナテオーラは夫とともにその場をあとにした。
追うことは許されないだろう。シュナイダーはそう理解して項垂れ、エルフの国ガラシアを去った。
ルナテオーラは、オルヴィアスとローニャがうまくいけばいいと思っている。オルヴィアスにとっては、ローニャに想いを告げるのになんの障害もない状況だ。彼に直接ローニャの居場所を教えてくれと頼んでも、無駄だと悟った。
「待って！　シュナイダー！」

シュナイダーが学園に戻ると、ミサノに声をかけられた。しかしそちらを見もせず、寮の部屋に入り扉を閉める。

それでも扉を叩いてくるミサノに、シュナイダーは言い放った。

「もう会わないと言っただろ」

「なぜ私を信じてくれないの、シュナイダー！　ローニャが嫉妬して私に嫌がらせをしていたことは、全部私の嘘だと言うの!?」

「誤解だったんだ！　ミサノ、全部誤解だった！　オレも君も誤解して、ローニャをあんな目に遭わせてしまった！　オレも、君も、悪いんだ。……顔を合わせると、君を責めたくなってしまう。傷付けるようなことを言ってしまうかもしれない。だからもう、君とは会えない。頼む……諦めてくれ」

シュナイダーはもう一度、別れを告げる。

ミサノに騙されたのだと責任転嫁しないためにも、シュナイダーは彼女と顔を合わせるつもりはなかった。

「オレは……ローニャを取り戻したいんだ。誤解していたのだと説明して、許しを乞いたい……。どうなるかはわからないが……結果がどうあれ、オレと君の関係は終わりだ。帰ってくれ」

そう告げて、シュナイダーは扉のそばから離れたのだった。

第1章　❖　恍惚の告白。

1　妖精のお手伝い。

まったりした人生を送りたい。

前世からずっと、そう願っていた。

不思議なことに、私にはこの世界に生まれてくる前の——前世の記憶がある。

覚えているのは、息つく暇もないくらい忙しい毎日。朝早く起きて職場に行き、くたくたになるまで仕事をして、夜遅くに帰宅する。そんな苦しい日々の果てに、私はとうとう息絶えてしまったのだった。

そうして気が付くと、とある人物に生まれ変わっていた。それは、前世の私が好きだったネット小説の悪役令嬢——ローニャ・ガヴィーゼラ。ローニャは主人公から婚約者を奪われてしまう、意地の悪いキャラクターだった。

そんなローニャとしての人生は、前世以上にせわしなかった。

物心ついた頃からさまざまな教育を受け、息もできないくらい苦しい生活。家族はとても厳しく、

伯爵令嬢としてひたすら高みを目指すよう強要された。
そんな生活の中で、大きな安らぎを与えてくれたのは、ロナードお祖父様とシュナイダー。家族で唯一優しく接してくれたお祖父様と、「一緒に愛を育もう」と言ってくれた婚約者のシュナイダーがいたから、私は苦しい生活に耐えられた。
でも、私とシュナイダーがともにハッピーエンドを迎えることはなかった。
小説の舞台となるサンクリザンテ学園に入学すると、シュナイダーは小説の主人公であるミサノ嬢と出会い、少しずつ変わっていった。そして小説の展開通り、私は婚約者を奪われて、学園を追放されてしまったのだ。
私はそんな運命を受け入れて、ガヴィーゼラ家からも飛び出した。
そうして行き着いたのは、最果ての田舎街ドムスカーザ。
そこで私は、小さな喫茶店――まったり喫茶店を始めた。
前世からの願いは叶って、私は念願のまったりライフを手に入れたのだ。
けれど、私を狙っていた悪魔ベルゼータの罠に堕ちてしまい、魔力で汚されてしまった。助けに駆け付けてくれた獣人傭兵団さん達のおかげで軽症で済んだものの、治療は必要。
城に仕える魔導師グレイティア様に治療魔法をかけてもらった。この治療が終わるまで七日はかかるみたい。
治療中は傾眠状態に陥りやすく、意識もはっきりしないという。

私を助けてくれた皆さんと食事をしている今だって、夢を見ているような心地だ。
「もう一度言うぞ、ローニャ」
話しかけられて、私ははっと我に返る。
「おかわりですか？　グレイ様」
「あ、いや、その……いただこう」
店のカウンター席の前に立った私を見てそう言い、グレイ様はすぐに目を伏せた。
グレイ様ことグレイティア様は、深い紫色の長髪を後頭部の高い位置で一つに束ねている、長身の男性だ。瞳は紫水晶のように美しく、目は綺麗なアーモンド型。フードつきの黒いローブには、位が高いことを示す装飾が多く施されている。
私の兄と同学年の彼は、首席でサンクリザンテ学園を卒業。その魔法の腕を見込まれて、今は魔導師として城に仕えている。この国で一番の魔導師と言っても差し支えないだろう。
そんなグレイ様は私にとって良き先輩であり、魔法の師匠でもある。
空になったグレイ様のお皿を下げ、おかわりのビーフシチューを入れて再び彼の前に置いた。
「オレもおかわり！　店長！」
テーブル席にいるチセさんから、声が上がる。
彼は空になったお皿をカウンターまで持ってきてくれた。それを受け取っておかわりをよそう。
ほどよく煮込まれたシチューの香りを嗅ぎながら、お皿を彼に手渡す。

チセさんは、真っ青な髪と瞳を持つ大柄の男性で、頭には犬の耳がついている。厳密に言えば、それは狼の耳。おしりには真っ青で大きな尻尾もある。それらは狼の獣人族の特徴だ。彼はこの最果ての街を隣国の荒くれ者達から守っている、獣人傭兵団の一人。

チセさんがシチューの匂いを嗅ぐと、もふもふした彼の尻尾が上機嫌に左右に振れた。

「ローニャ。さっきも話したが、悪魔の魔力で負の感情が増幅しないよう、治療魔法は負の感情が高まると強制的に眠りに落ちるよう作用する。君の場合、怒りや憎しみが高まることはないだろうが、悲しみや恐怖に対してもこの副作用は起きる。だから充分――」

「気を付けて休めってことだろー？　お嬢、うとうとしてるけど聞いてるって。オレ達だってさ。な？　ラクレイン」

グレイ様の言葉を遮ったのは、彼の右隣に座るリュセさん。彼も獣人族の傭兵で、キラキラした純白の髪の間から生えているのは、黒い模様のついたチーターの耳。後ろでは、同じく純白の太くて長いチーターの尻尾が揺れている。モデルのようにスラッとした体形で、外見も王子様系のイケメンだ。

彼は私の真後ろに立つラクレインに、同意を求めるように視線を投げかけた。

ラクレインは人に近い姿に変身しているけれど、その正体は私と契約している幻獣だ。

一見、白くてふわふわした服に身を包んでいるように見えるが、よく見れば頭から伸びた真っ白な羽根が胸元を覆っているのだとわかる。両腕はとても大きな翼の形で、床に垂らした長い尾はラ

イトグリーンからスカイブルーに艶めいている。

「もう眠ったらどうだ？」

ラクレインは私の瞳を覗き込んで口を開いた。

「ラクレインの言う通りだよ。片付けは僕らでやるから休みなよ、ローニャ。喫茶店はしばらく休店」

ラクレインの瞳をぽけーっと見つめていると、別の声が聞こえてきてそちらに顔を向ける。

声の主は、グレイ様の左側に座っているセナさん。緑の髪と瞳を持つジャッカルの獣人で、ピンと立った大きな耳と、もっふりとした尻尾が特徴。小柄で物静かな雰囲気の彼もまた、傭兵団の一人だ。

「でも……」

「ほら。二階に戻るぞ」

片付けをさせては申し訳ない。それに何より、まだここでまったりしていたい。

そう思うけれど、ラクレインの翼に身体を抱え上げられてしまう。こうなっては、逆らえる気がしなかった。

「えっと……では、お言葉に甘えて……」

「ああ、ゆっくり休め」

低い声を発するのは、チセさんの向かいに座っていたシゼさん。彼は黒い獅子の獣人で、チセさ

んと同じくらい大柄だ。
私は彼らに力なく微笑んで、うとうとしつつも頭を下げた。
するとカウンターの上で食事をしていた蓮華の妖精、ロト達が私のお腹に飛び乗ってくる。一緒についてきてくれるようだ。
ロトは二頭身で、頭の形はまるで蓮華の蕾のよう。ぷっくりとした胴体からは、小さな手足が生えている。ライトグリーン色の肌をしていて、ペリドット色の瞳がつぶらで可愛らしい。触ると、マシュマロみたいにふわふわしている。
私は、ラクレインの操る風によって二階へと運ばれた。
二階の部屋の真ん中にあるのは、シングルベッド。窓際にはグリーンのソファーが一つと、その隣に机が置いてあるだけのシンプルな内装だ。
そこに立った私は、少しの間ぽけーと部屋を眺めた。
「どうした？　眠らないのか？」
「んー……」
寝る前にしないといけないことがあったはず。それがなんだったか考えようとするけれど、眠気が襲ってきて、立ったままなのに眠ってしまいそうになる。
そうだ、お風呂に入らなければ。
「お風呂に入ります」

私はラクレインにそう言って、小さなバスルームに入った。
バスタブにお湯をはり、ラベンダーの入浴剤を入れると、甘い香りが広がる。これを入れた湯に浸かると、肌がしっとりすべすべになるのだ。
リラックス効果のあるラベンダーの香りに、ますますうとうとしてしまう。そんな私を眠らせないように、バスタブの縁にいるロト達が一生懸命声をかけてくれる。そのおかげで、なんとかお風呂から上がって寝間着に着替えられた。
バスルームから出て、待っていたラクレインに風で髪を乾かしてもらう。心地いい温風が、私の白銀の長い髪を舞い上げていく。
その間、私は半分寝ていたようなものだったけれど、完全に乾くまでは枕に顔を埋めないように頑張る。そして、温風がやむとともにベッドに身を沈めて目を閉じた。
そのまま夢の中へ旅立とうとした時、下の階から話し声が聞こえてきた。はっきり聞き取れないけれど、何やら賑やかだ。つられて私も楽しい気分になってくる。クスクスと笑っていると、ラクレインの翼で頭を撫でられた。ふわふわ。
そっと目を開けばそこにはロト達がいて、私をじっと見つめていた。
「こんな有様では、ロト達のお手伝いができませんね……」
私は精霊の森の主・オリフェドートと契約しているので、そこに棲む妖精達と協力関係にある。もちろんロト達とも互いに助け合う契約だ。いろいろと手助けしてもらう代わりに、彼らが世話を

している蓮華畑での仕事を手伝うことになっていた。
とはいえ、ここで暮らし始めてから、まだ一度しか手伝いを頼まれたことはない。喫茶店を開いたばかりだったので、私が新しい環境で落ち着くまで待っていてくれたみたい。
そういえば前にロト達の蓮華畑を手伝った時、少し困った出来事があったのよね……。私はその時のことを思い出しながら、眠りに落ちていった。

2　永遠の片想い。

――ロト達のお手伝いをしたのは、少し前のこと。
その日も、いつもと同じように、お店の開店準備を手伝ってくれたロト達と一緒に、まったりと朝食を取っていた。
朝食は、アボカドを使ったメニュー。精霊の森で果物を育てているロト達が、とびっきり美味しいアボカドを持ってきてくれたのだ。
食べやすいように切ったアボカドを器に盛り付けて、甘いミルクをありったけ注ぐ。アボカドは美容にもよく、甘くとろけて美味しい。
ロト達も満足げに笑みを浮かべている。一緒に作ったサラダも食べて、ご馳走様。お礼のケーキを渡してロト達を見送ったあと、私は店を開けた。
まったり喫茶店は、開店直後から慌ただしくなる。その日もあっという間に朝食とコーヒーを求めるお客さんで席が埋まった。
店の席は少ないけれど、大抵は「相席しましょう」とお客さん同士で声をかけ合ってくれる。仕事前にコーヒーだけを求めて立ち寄ってくれるお客さんもいるので、待たせないように急いで対応した。
「やっぱりローニャちゃんのコーヒーが一番だな。これなしでは仕事ができないよ」
この時間に多い男性のお客さん達は、よくそう言ってくれる。気に入ってもらえて何よりだ。
「ありがとうございます」
私はにっこりと笑ってお礼を言った。
九時を過ぎてブランチタイムになれば、女性のお客さんのほうが多くなる。彼女達のほとんどはケーキをご所望だ。
お店で食べるお客さんだけでなくテイクアウトのお客さんもたくさんいるので、忙しくて目が回るけれど、笑顔で美味しいと言ってもらえると苦にならない。お客さんは皆いい人ばかり。
やっとお客さんの出入りが落ち着き始めた頃、ケーキの予約注文をしてくれた常連さんが来た。金髪を百合の花の髪留めでまとめた少女は、サリーさん。そして彼女と仲良しのケイティーさんとレインさん。素敵な男性に見初められたいと、婚活中の三人組だ。

今日は隣街で同年代の男性達とパーティーをするそうで、そのケーキを買いに来てくれたらしい。私も一緒に参加しないかと誘われたけれど、仕事を理由に断らせてもらった。

あらかじめ準備しておいたケーキを渡すと、三人は嬉しそうな声をあげてくれた。

「ローニャ店長さんのケーキがあれば大盛り上がりね！」

「これに店長さんのお茶もあれば完璧なんだけど」

サリーさんとレインさんの会話を聞いて、少し考える。

以前、別のお客さんからも、ケーキをテイクアウトしてもらった時に似たようなことを言われたことがあった。その時はそれぞれのケーキに合うお茶の種類を伝えたけれど、後日、やっぱり私が店で出しているお茶のほうがいいと言われた。

コーヒーもお茶もテイクアウトはできるものの、時間が経てば冷めて風味も落ちてしまう。また私が店で出しているのは精霊の森から仕入れた材料を使ったものなので、まったく同じものをお客さんが手に入れるのは難しい。

お客さんが家でも淹れられるように茶葉を販売すればいいのだけれど、それならそのまま売るのではなく、もう一工夫したいところ。お店の外でも美味しく飲んでもらいたいもの。

よし。次の課題は、茶葉の販売にしましょう。

サリーさん達を見送った私は、お茶を淹れてカウンター席に座った。酸味が少なく甘いラズベリーティー。ほっと息をついて、ティーカップの中を見つめる。

午前中に来るお客さんの中には、午後のおやつにケーキを買っていく人も少なくない。ほとんどのお客さん達は、獣人傭兵団が来る午後にはお店に入りたがらないから。

そんなお客さん達に、お店の外でも美味しくお茶を飲んでもらえる工夫をしなくては。

考え込んでいると、突然お店の中心に光の円が現れた。その中から「あいっあいっ」と声が聞こえてきて、ロト達が三列に並んで出てくる。足も手も動きがぴったりと合っていて、上手な行進だ。

「こんにちは」

愛らしいなと思わず笑みを零しながら、しゃがんで挨拶をする。

ロト達は私の前でピタッと止まり笑みを返してくれたあと、周りをキョロキョロ見回した。それからちっちゃな両手を合わせて首を傾け、お願いのポーズを取る。

これは、蓮華畑のお世話を手伝ってほしいという意味だ。

毎日のように喫茶店を手伝ってくれる彼らのために、蓮華畑へ行くことに決めた。店の外には閉店の看板を出しておく。

「さて、どこの蓮華畑に行くのですか？」

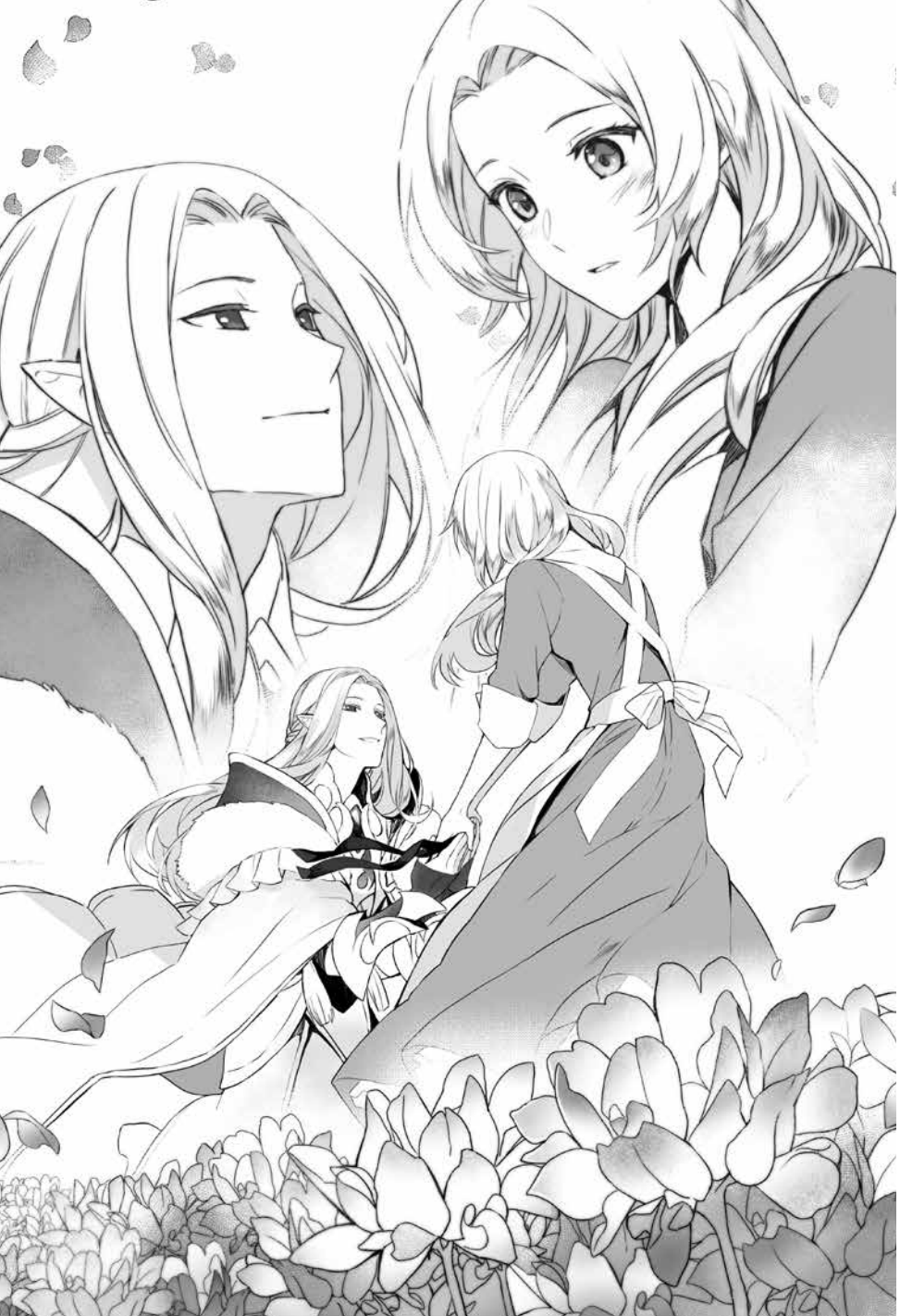
精霊の森で暮らす彼らだけれど、森の外にあるあちこちの蓮華畑のお世話をしている。

しゃがんで尋ねると、ロト達はぴっと腕を一斉に東へ向けた。ここから東に行ったところに、一番近い蓮華畑があると思い出す。一番近いとはいえ、畑があるのは国外れだ。

私のドレスをよじ登ってきたロト達が、連れてってと言わんばかりに手を上下に振った。こくん

と頷いてから、ロト達を落とさないように慎重に立ち上がる。
カツン――踵で床を叩き、魔力を込めて魔法陣を描く。そこからふっと白い光が溢れ出て、私とロト達を包み込んだ。
次の瞬間、咲き誇る蓮華草が視界いっぱいに映った。蓮華の花は赤紫に色づいて、丘の下から吹き上げてくる風に揺れている。舞い上がる花びらを追って見上げた空は、雲一つないスカイブルー。清々しい空気が気持ち良くて、私はゆっくりと深呼吸する。
すると、髪を結んでいた夜空色のリボンがほどけて、風にさらわれてしまった。リボンが飛んでいったほうを振り返れば、誰かがリボンを捕まえてくれる。
まさか人がいるとは思わなかった。私は驚きながら相手を見て、ますます驚いた。
「待っていたぞ、ローニャ」
金色の装飾が施されたマントをまとった、美しい顔立ちの男性。耳の先は尖っていて、種族はエルフ族だとわかる。
大理石のような白い肌に、キリッとした印象の眉、藍色の瞳、淡い桜色の唇。煌めく白銀色の長髪は前髪ごとハーフアップにまとめられている。
星の輝きにも似た白銀や白金色の髪と藍色の瞳を持つ者は、エルフの中でも王族にしかいない。
彼はガラシア王国の王弟で、戦士としても名高いエルフだ。
「オルヴィアス様……お久しぶりです」

私は精一杯の笑顔を作って、挨拶をする。決してわざとらしくならないように笑みを深めて、風に揺れる髪を片手で押さえた。
なぜなら私は――……彼が少々、苦手なのです。
オルヴィアス様とは、昔から面識があったものの、社交の場で挨拶を交わすくらい。
私は彼について、ほとんど本を通して知った。
数々の戦いで勝利を収めて、歴史に名を残したエルフの戦士。
姉であり女王であるルナテオーラ様のために剣を振るい、エルフの国を守ってきた英雄。
そんな彼と話をするようになったきっかけは、この丘で何度かお会いしたことでした。どうやらここは、オルヴィアス様が仕事の息抜きに来る場所でもあったらしい。
だから、彼とここで会うのは不思議ではない。
けれど彼は、私を待っていた、と口にしていた。一体どういう意味でしょう。
オルヴィアス様は私の目の前まで歩み寄ってきて、リボンを差し出してくれた。両手で受け取ると、その手をギュッと握られる。
「妖精ロト達よ。少し二人で話をさせてくれ」
オルヴィアス様は、足元のロト達に告げる。
人見知りのロト達も、エルフであるオルヴィアス様には臆することがない。コクリと頷くと、蓮華草の海に潜っていった。



「お話とは、なんでしょうか？」
貴族でなくなった私に話だなんて、どういう内容かまったく見当がつかないけれど、とりあえず笑みを保って尋ねてみる。
するとオルヴィアス様は、私の手を握ったまま片膝をついた。マントが蓮華草の上にふわりとかかり、長い髪が風になびいて宝石のように輝く。
「どうなさったのですか？　オルヴィアス様」
「シュナイダーとの関係が終わったばかりで、まだ傷が癒えていないことは重々承知している。だが、考えてもらいたい」
そう言って見上げてくる藍色の瞳は、星が瞬くように金色にちらちらと輝いて見える。その瞳に熱が込められていると気付いた瞬間、オルヴィアス様は再び口を開いた。
「ここで初めて会った日から、惹かれていた。シュナイダーと婚約関係にあったから俺の気持ちは秘めておくつもりではあったが、そなたと生涯をともにする好機を逃すつもりはない。どうか、我が妻になってくれ」
誇り高きエルフの戦士から、結婚の申し出。
私は突然のことに言葉を失ってしまう。混乱して放心しかけてしまったけれど、早く答えなければとなんとか頭を働かせた。
私も膝をついて、オルヴィアス様と視線の高さを合わせる。そして、唇を震わせながら声を絞り

出した。
「ご、ごめんなさい……オルヴィアス様」
ビクビクしつつも、はっきりと断る。
オルヴィアス様が目を見開くのを見て、私は視線を逸らしてしまった。
「……今すぐに答えろとは言っていない。真剣に考えてから答えを出してくれ。今は誰かと結ばれることなど考えられないかもしれないが」
オルヴィアス様が私のことを好いてくださっていたとは。アプローチされたことなんてなかったし、そもそも彼はこの丘で会った時もあまり話をせず、座って私とロト達を眺めるか、横になって休んでいるかのどちらかだった。
「身に余る光栄です」
「求婚に、身に余るも何もないだろう」
「いえ、私は王弟殿下のご子息に婚約破棄をされて、家を出た身です。私など、英雄であるオルヴィアス様にはふさわしくありません」
「己を過小評価するな。我が国は実力を重視する。どんな過去があっても、そなたの力は認められるだろう」
「私は貴族に戻るつもりは……」
「無理に戻れとは言わない。それよりも、なぜさっきから目を合わせないんだ！　この求婚を受け

入れられない理由があるのなら、はっきり言ってくれ！」
私がもっともらしい理由を並べているだけだと気付いて、オルヴィアス様は問い詰めてきた。私はビクッと震えてしまう。はっきり言うなんて、できることなら避けたいけれど、こうなったら白状するしかない。
「わ、私は……オルヴィアス様が苦手なのですっ」
チラッとオルヴィアス様の様子を確かめてみると、面食らったような顔をしていた。申し訳なくなって私は再び目を伏せる。
「な……なぜ……？」
「……オルヴィアス様は、はっきりとものを言うお方です。間違いも欠点も、的確に指摘してくださいます。しかし、そこが……私の苦手な兄――ロバルトお兄様に似ているのです」
この丘での出会いを機に、オルヴィアス様からは何度か剣術の指導を受けたことがある。どことなくロバルトお兄様に似た彼の口調に、私は内心ビクビクしていた。もっとも、オルヴィアス様が私を嫌っているわけではないことはわかっている。それでも、苦手なのだ。
「……俺の言葉に、そなたは傷付いていたというのか……？」
そう言いながら、オルヴィアス様がパッと私の手を離す。
「も、申し訳ございません。オルヴィアス様は悪くないのです。……ただ、厳しい口調から、ロバルトお兄様を連想してしまいまして……」

頭ごなしに罵倒してくるだけのロバルトお兄様と違って、オルヴィアス様は私の努力を認めてくれた。口調が厳しいからといって、決して同じではない。それはわかっているつもりだ。

「人を罵るロバルトお兄様と、誠心誠意向き合ってくださるオルヴィアス様の言葉は違います。けれども、私は……申し訳ありませんが、オルヴィアス様のことを異性として考えることはできません」

苦手な兄に似ているからだなんて、ひどすぎる断り方だ。だけどこれが私の正直な気持ちだった。視線を上げると、彼は傷付いたような顔で放心していた。

「オルヴィアス様……？」

やがて彼は眉間にシワを寄せ、痛ましい表情で俯いた。なんと声をかけていいかわからず見つめていたら、オルヴィアス様がポツリと呟く。

「……すまない、出直す」

オルヴィアス様は静かに立ち上がると私に背を向けて、丘を去っていった。その痛々しい後ろ姿を見送って、罪悪感に押し潰されそうになる。

兄に似ているから苦手だなんて、言うべきじゃなかった。でもオルヴィアス様に詰め寄られて、白状するしかないと思ってしまった。

その時、ロト達が戻ってきた。先頭にいるロトは、なぜか芋虫を抱えている。オルヴィアス様を捜してキョロキョロとあたりを見回すロトに、私は静かに告げた。

「オルヴィアス様はお帰りになられました」

そう言うと、「そっか」と相槌を打って、ロトは芋虫を自慢げに差し出してきた。私の人差し指よりも太い、緑色の芋虫だ。蝶の幼虫でしょう。

「ああ。この芋虫さんが千年芋虫さんに似ているって言いたかったのね」

この芋虫を連れてきた理由がわかって、私は噴き出してしまう。ロト達は嬉しそうにニコニコした。

オリフェドートの森には、千年芋虫と呼ばれる、それはそれは大きな芋虫さんがいる。馬車よりも大きく、茶色い身体にはところどころ苔が生えていて、じっとしてたら倒れた大木にも見える。千年の間、芋虫の姿で過ごしたのちに蝶になると言われており、今のところオリフェドートの森でしか生息が確認されていない貴重な存在だ。とても温厚で、綿毛の妖精フィーと仲がよく、彼らを乗せてよく森を散歩している。

そんな千年芋虫さんと蝶の幼虫は、つぶらな目と丸い口が似ていた。

「この子はそのうち、素敵な蝶になってここを舞うのでしょうね」

掌に載った芋虫を見つめながら言うと、ロトはまたそれを抱えた。

「さて、始めましょう」

この丘に来た目的は、ここの蓮華草の手入れだ。髪をリボンで一つに束ね直してから作業を始める。

一輪一輪手に取って、傷がないことを丁寧に確認していく。問題があれば魔法で癒して、土が枯

れていれば水を与える。
花の数は多いけれど、ロト達もたくさんいるのでそれほど時間はかからない。
しばらく作業を続けていると、一輪の蓮華草に触れた私の手をロトが掴んだ。蓮華に触れようとしたところ、間違えて私の手を掴んでしまったみたい。ロトは、ポカンとこちらを見上げている。
「一緒に診ましょう」と笑いかければ、ロトは顔を綻ばせてコクンと頷いた。
蓮華の花は、蝶が輪になってとまっているような形だ。白地に赤紫色が滲むように色づいた花びらを軽く摘まむと、先まで瑞々しく潤っている。葉や茎まで指先で撫でながら確認し、根元の土が湿っていることを確かめる。問題なしだ。
一緒に確認したロトとにこりと笑い合って、次の蓮華草に移る。
なんとなくオルヴィアス様が去ったほうに目を向けるけれど、もちろんそこにはもう彼はいない。思えば、誰かからこんな風に想いを告白されるのは初めてのことだ。
あまりに驚いてお礼を言いそびれてしまったと気付き、私はため息を零した。
気持ちを切り替えようと、深呼吸を一つ。それからもう一度、蓮華草に触れた。その時ふと、オルヴィアス様の姉であるルナテオーラ女王の顔が浮かんだ。
私が令嬢だった頃、ルナテオーラ様にはよくお茶会に呼んでいただいた。そういえば彼女は、好んで紅茶の中に花を入れていた。ガラシア王国の国花ピウスという、小さな白い花。星にも似た五枚の花びらが愛らしく、ベルガモットのような香りがして、蜜が濃厚なため紅茶に入れると甘みが増す。
紅茶に浮かぶ、小さな花――
いいアイデアが浮かんだと、私は口元を緩ませた。
丘の蓮華草の手入れをすませたら、店に戻ってさっそくとりかかってみよう。そう決めて、私は蓮華のお世話を進めていった。

店に戻った私は、いくつか小さな花を摘んできてくれないかと、オリフェドートの森で暮らす妖精にお願いした。
ルナテオーラ様がしていたように、お茶に花を浮かべて提供すれば素敵かもしれない――そう考えて、すぐに試作してみることにしたのだ。
花の到着を待っている間、ロト達に手伝ってもらってクッキーを焼きながら、持ち帰り用の茶葉の試作準備を進める。
やがて魔法陣が現れ、そこから妖精達が花を持ってやってきた。
「ニャーニャー！」
小さな蝶の妖精ピコロ達が、私の顔に飛びついてくる。
彼らはうまく人の言葉を発音できないので、私のことを「ニャーニャー」と呼ぶ。
しっとりした感触の彼らは、身長わずか五センチ。幼い子どもの姿をしていて、背中にはパステ

ルカラーの小さな蝶の羽がついている。ピコロ達からはマカロンに似た甘い香りがするけれど、今日は花の香りもした。摘んできてくれた花の匂いだ。

ピコロ達に摘んできてもらった花はとっても小さくて、甘い蜜が出るもの。これらはお茶の風味を壊すことなく、甘みを足してくれる。そして飾り付けにもなるのだ。

「花をありがとうございます。お礼にクッキーを用意しているので、焼き上がったらぜひ食べてくださいね。シナモンのクッキーです」

遊ぶように私の髪に花を差し込んでいたピコロ達に、そう伝える。するとピコロ達は両手両足を広げて大喜びした。

さて、さっそくお茶の準備に入るとしましょう。

店で出しているお茶は、ローズティーとラベンダーティーとミルクティー。それ以外にも、ケーキに合わせて果物のお茶も用意している。

まずはローズティーで試してみることに。これには、オリフェドートの森の妖精に頼んで分けてもらった薔薇の蕾を使っている。私は保存の魔法をかけた瓶を手に取り、そこから薔薇の蕾を取り出した。

準備しておいたシートの上にそれを一つ置く。

「初歩的な保存魔法です」

興味津々で見つめてくるピコロ達に説明する。

植物で作られたこのシートには、中に包んだものの時を止める魔法がかけてあり、お湯に入れると簡単に溶ける。

薔薇の蕾の横に白い花を添えてシートで包み、ギュッと魔力で閉じ込めた。するとシートはカプセル状に変化し、花の入ったビー玉のようになる。

それをカップに入れてお湯を注ぐ。するとカプセルが消えてお湯が赤く染まり、白い花が浮かんできた。

「んー……ローズティーには赤い花のほうがいいかしら」

他の花を選ぼうとしたら、ピコロ達がこれが合うと言わんばかりに赤い花を差し出してくれた。

それを受け取って、先ほどと同じようにシートにくるんでお湯を注ぐ。それからも、ルナテオーラ様の紅茶を思い浮かべながら、いろいろと試してみた。

そうしているうちにクッキーが焼けたので、ロトとピコロに食べてもらう。私もお茶の味や香りを確認しながら、クッキーを一つ口に運ぶ。

やがて、それぞれのお茶に合う花が決まった。

赤いローズティーには、カップの底に堂々と咲くような、薔薇に似た小さな赤い花を一つ。

淡い紫色のラベンダーティーには、星形の青い花を三つ。

茶色いミルクティーには、たんぽぽによく似た白い花を一つ。

ラベンダーティーとミルクティーは、飲む時に茶葉が邪魔にならないよう不織布に包んでから

シートにくるんである。いわゆるティーバッグみたいなものだ。
満足のいく出来に、私は笑みを零す。手伝ってくれたロト達は、おめでとうと拍手してくれた。
ピコロ達はというと、クッキーを平らげたあとお皿の上で眠ってしまった。まるで遊び疲れた子ども達がお昼寝しているようだ。
起こすのは可哀想だし、どうしましょう。
私が考えていると、ロト達は「任せて」と胸を叩いてみせ、皆でお皿ごとピコロ達を運んでオリフェドートの森に帰っていった。

翌朝、お持ち帰り用のお茶のカプセルを三つ、半透明の袋に入れてラッピングした。さっそくそれをお客さんにおすすめしてみる。
まずは店で実際にお湯を注いで、試しに飲んでもらった。お客さん達には、いつも出している紅茶と味は変わらない上に、見た目が素敵だと好評だ。
「店長さん、てんさーい！　これ本当にかぁわぃいー！」
細身で可憐な美少女――セリーナさんがはしゃいだ。
「ありがとうございます。セリーナさんも、お持ち帰り用をご準備しましょうか？」
「うん！　兄さんがまた、家で本に夢中になってるから、ケーキも一緒に持って帰ってあげようかな。ケーキはいつものチョコとタルトにして、お茶は、んー……ラベンダーティーをください！」

セリーナさんはうちの店の常連さんだけど、彼女と親しくしている人を見たことはない。店で顔見知りの人と会っても挨拶を交わす程度。人付き合いが苦手なわけではなさそうなのに、親しくなることを避けている様子だ。
セリーナさんはいつも一人で来るので、彼女のお兄さんにも会ったことはない。よくセリーナさんが話してくれるので、どんな人なのか気になる。
「今度、ぜひお兄様も一緒に来てくださいね」
「あー……うん、誘ってみますー」
セリーナさんは少し視線を泳がせたあと、椅子から立ち上がった。
そんな彼女に、ラベンダーティーの袋を手渡す。その時、彼女の色白の肌に指先が触れて、魔力の気配を感じた。
魔法は、すべての人が使えるわけではない。魔力が充分にあり、使い方を学んだ者だけが使えるのだ。けれどセリーナさんには、それなりに魔力がありそう。彼女が魔法を学べば、そこそこの使い手になるかもしれない。
そんなことを考えながら、セリーナさんのお会計の対応をした。
その時、ドアの鐘がカランと鳴って、新たなお客さんが来たことを知らせる。
そちらに目を向けた瞬間、私は驚愕に目を見開く。深い緑色のローブを羽織っているため旅人に見えるけれど――彼だ。

「オルヴィアス様……」
星のように輝く長い髪、尖った耳、金箔がちりばめられたような藍色の瞳。
エルフの英雄、オルヴィアス様。
大いに混乱して固まってしまった。なぜ、オルヴィアス様が来たのか。そもそも、どうしてここがわかったのか。
お客さんも全員がオルヴィアス様に注目していた。国境付近の最果ての街とはいえ、エルフは珍しい。
ただ、いくらなんでも顔を見ただけで、彼がオルヴィアス様だと気付く人はいないでしょう。……本をよく読むセナさんなら気が付くかもしれないけれど。
「いらっしゃいませ」
私は動揺を抑え込んで、挨拶をする。
オルヴィアス様は、ここが私の店だと知っていて来たらしく、平然とした様子で入ってきてカウンター席に座った。そこは先ほどまでセリーナさんが座っていた席だったので、オルヴィアス様の横から手を伸ばしてテーブルを拭く。
たったそれだけのことなのに、妙に緊張した。
「おすすめはなんだ？」
「今日のおすすめは、こちらのお茶です。茶葉をお持ち帰りしていただけるよう作った新作で、目

でも楽しめるように工夫してあります」
試しに淹れてあったものを、オルヴィアス様に見てもらう。その様子を、他のお客さん達が凝視していた。
「当店では他にも、ケーキに合うお飲みものをご用意しております。ケーキはこちらのメニューをご覧ください」
「……そなたが、俺にすすめたいケーキと飲みものを頼む」
「えっ」
藍色の瞳が私を見上げた。
オルヴィアス様のお好みなんて想像がつかない。そもそも甘いものがお好きなのかどうかさえ知らないから、すすめたいものと言われても困ってしまう。
「……私としては、深いコクがあるコーヒーを一度飲んでいただきたいです」
私の一番の自信作といえば、コーヒーだ。オルヴィアス様のお口に合うかはわからないけれど、一度試していただきたい。
「チョコレートケーキと一緒に、いかがですか？」
ダークチョコレートでコーティングした濃厚なケーキで、コーヒーとよく合うのだと説明する。
「ではそれをもらおう」
「はい。すぐお持ちいたします」

そう言ってキッチンに戻ろうとしたら、後ろに立っていたセリーナさんと目が合った。彼女はは っと我に返って、そそくさと店をあとにする。

ご来店、ありがとうございました。

セリーナさんの背中に一礼してキッチンに入り、すぐにコーヒーを淹れる。カットしたチョコレートケーキをお皿に盛り付け、コーヒーと一緒にオルヴィアス様の前に置いた。

「いい香りだ……」

「ありがとうございます」

コーヒーの香りを楽しんでくれるオルヴィアス様を、カウンター越しに見る。

お客さん達の目は、まだオルヴィアス様に釘付けだ。けれど誰も彼に話しかけようとはしない。それどころか、エルフの美しさに圧倒されたように息を潜めている。

そんな中、オルヴィアス様はとても静かに、ゆっくりと味わってチョコレートケーキを食べていく。

お店の中は静まり返り、お客さんは一人また一人と席を立つ。そうしてとうとう、オルヴィアス様一人だけになってしまった。

「すまない。営業の邪魔になってしまったようだな。……目立たないようにしたのだが」

「いえ、オルヴィアス様に謝っていただくことではありません。この街の人は皆さんフレンドリーなのですが……」

オルヴィアス様は、充分気を遣ってくれている。

「あの、それで……」

二人きりになったので、疑問を口にしようとした。でも何から聞こう。ここに来た理由？　この店を知っていた理由？

「オルヴィアス様は、どうして私がここにいることをご存じだったのですか？」

「しばらく前、この街を覆うほどの結界の魔法を使っただろう。その時俺はあの蓮華草の丘にいて、そなたの魔力だと気付いた」

あの魔法か、と私は苦笑いしそうになるのを堪えた。

以前、このドムスカーザの街を盗賊の魔法攻撃が襲った。その時私は結界魔法で街を守って被害を最小限にとどめ、獣人傭兵団が盗賊を追い払ったのだ。

「そなたの無事を確認しに一度この街に来て、喫茶店をやっていると知った。だが、どうしてもあの丘で想いを打ち明けたかったので、声はかけずにあそこで待っていたのだ」

オルヴィアス様がここに来た理由はきっと――求婚の件。そう予想して、私はごくりと唾を呑み込んだ。

「……随分と待ったがな。もうあそこには来ないのかと、少し不安に思っていた」

「あ、それはおそらく……ロト達が気を遣ってくれていたからです。私が新しい生活に慣れるまで、手伝ってほしいと言わないようにしてくれていたようで――」

学園に通っていた時も、ロト達はまず私が忙しくしていないかを確認してくれていた。
「申し訳ありません、お待たせしてしまって」
「い、いや……そなたが謝ることではない。俺が勝手に待っていたんだ……」
オルヴィアス様は俯いて口ごもってしまう。それから言葉を選ぶように、再び口を開いた。
「……ラベンダーティーを頼む」
「はい」
見ると、コーヒーが入っていたカップは空になっている。
すぐにラベンダーティーを用意して、空になったカップと交換した。
ラベンダーティーに浮かぶ青い星形の花を見つめ、オルヴィアス様が口元を緩める。
「姉上が気に入りそうだ……」
「実はルナテオーラ様が紅茶に花を浮かべていたことを思い出して、それをヒントに作ってみたのです」
「……なるほど。いつまでもカップの中を見つめていたくなる。素晴らしい」
「ありがとうございます」
オルヴィアス様に褒められて、嬉しくなる。
「あ、よろしければ、ルナテオーラ様にお一つどうですか？」
「いや……姉上にはまだ……」

オルヴィアス様は、迷うようにそう言って口を閉じた。
気軽におすすめしてしまったが、さすがに女王様には持っていけないかと申し訳なくなる。そんなことを考えていると、オルヴィアス様は、真剣な面差しで口を開いた。
「……身を隠したいのならば、大きな魔法を使うべきではない。迂闊だぞ。もしあの時付近に悪魔がうろついていたら、そなたは見つかっている。それに、そなたの兄は追跡に長けている。こういった喫茶店の品が彼の手に渡れば、そなたの作ったものだと気付き、あっという間にここに辿り着いてしまうだろう」
オルヴィアス様は淡々と私の迂闊さを指摘した。
ロバルトお兄様は道具に込められたわずかな魔力からでさえ、持ち主を特定することができる。ロバルトお兄様がこんな最果ての街のお茶を手にするなんてことは絶対にないと思うけれど、想像するだけで血の気が引いて、身震いしてしまう。
「っ！　すまない。またそなたを傷付けるようなことを言ってしまったのか？」
「いえ！　お兄様に見つかった時を想像してしまっただけです」
オルヴィアス様に言われて、私は慌てて説明した。
「あの、私のほうこそ、昨日はオルヴィアス様を傷付けてしまい、申し訳ありません……」
申し訳なさから目を伏せた私に、オルヴィアス様は優しく声をかけてくれる。
「……次の客が来るまで、座って話を聞いてくれないか？」

入口のドアを気にしながら、オルヴィアス様は私に隣に座るよう促した。心配しなくとも、もうすぐお昼になるので、新しいお客さんは来ないだろう。

私は頷いて、隣の椅子に腰を下ろし、彼のほうを見た。オルヴィアス様は再び話し始める。

「そなたが正直に話してくれてよかった。想い人を傷付ける言葉を吐くような男のままではいたくはない。誰に対しても……罵倒しないよう努力する。直す」

オルヴィアス様は真剣な瞳で私を見つめて告げた。

「昨日は急に求婚して、驚かせてしまっただろう。……そなたを目にした瞬間、想いが溢れて堪え切れなかったのだ」

「あ……ありがとうございます、オルヴィアス様」

甘い言葉に思わず惚けそうになりながら、私は言いそびれていたお礼を伝える。

すると彼は私の右手を取って言葉を続けた。

「そなたと過ごした時間はわずかだったが、幸福と安らぎに満ちていた。穏やかに輝く、光の花のような人。瞼を閉じてそなたを思い浮かべるだけで、この胸が高鳴る。俺が愛する唯一の人」

熱い眼差しが、私の手に注がれた。そうやって見つめられるだけで、肌から熱が伝わってくるように感じる。

「変わってみせる。生涯連れ添う相手として見てもらえるまで努力する。だから、もう一度考えてほしい。時間がかかっても、俺は諦めない。俺がそなたを幸せにしてみせる」

オルヴィアス様が顔を上げると、藍色の瞳が見える。

「オルヴィアス様……」

なんと言葉をかけていいかわからない。

オルヴィアス様が変わったからといって、私の気持ちが変わる保証はできないし、また彼を傷付けてしまうかもしれない。

そう思って戸惑っていると、オルヴィアス様は口の端を吊り上げて、ちょっぴり不敵な笑みを浮かべた。

「そなたへの想いを認めた時に、永遠に片想いをする覚悟はできている」

オルヴィアス様の藍色の瞳が、きらりと瞬いた気がする。

彼は離れがたそうに私の指先に触れて、そっと手を離した。

「よい時間をありがとう、ローニャ。また来る」

不思議な輝きを放つ長い髪をなびかせて、オルヴィアス様はローブからお金を取り出してカウンターに置き、白いドアを開けて帰っていく。

じんわりと熱を帯びた頬を押さえた私は、椅子から立ち上がることさえできなかった。

第2章　❖　もふもふ。

1　まったり療養。

目を覚ますと、私はベッドの中でラクレインの翼に包まれていた。気持ちが良い。
「起きたか。昨日から一向に目覚めず、心配していたところだ」
「ん……？」
まだ眠いけれど、ラクレインの言葉に耳を傾ける。
「もう昼になったぞ」
「……そんなに？」
長く眠っていたらしい。でも、まだ眠っていたい。
「オルヴィアスの名前を口にしていたが……奴の夢を見ていたのか？」
「オルヴィアス様？」
私は眠気たっぷりの声を出してしまう。
「まぁいい。下でシゼが待っているぞ。何か食べておけ。我も食事をして森で休む。何かあれば呼ぶがいい」
ラクレインは、私を起き上がらせる。
そうね、何か食べなくちゃ。いそいそと身支度していると、ラクレインは私の耳に羽根を挟んで颯爽と帰っていった。
この羽根は、幻獣を瞬時に呼び出せるアイテムだ。
オフホワイトのレースをたくさんあしらった空色のドレスを着て、もらった羽根はピンでしっかり髪に留めた。
ふわふわした足取りで一階に下りようとすれば、階段のところに男の人がいた。人間の姿を取ったシゼさんだ。
彼は琥珀色の瞳で私を見上げ、無言で手を差し出してくれる。その手に支えられながらゆっくりと一階に下りていく。
「あら……このサンドイッチは一体誰が作ったのですか？」
カウンターテーブルの上に、作った覚えのないサンドイッチがあった。レタスとベーコン、スクランブルエッグが挟んである。テーブルの端には、何やら酒瓶のようなものまで置いてあった。
「オレだ。食え」
「え？　シゼさんが作ってくださったんですか？」
「これくらい作れる」

「わぁ……嬉しいです、シゼさんのサンド。ふふ」
口元を押さえながら笑って椅子に座り、いただきますと手を合わせた。そしてサンドイッチをゆっくり噛んで味わう。美味しい。
「他の皆さんは？」
「仕事に行った。今日はオレがつきっきりで警護する」
「警護？」
私が首を傾げると、いつもの席に座ったシゼさんは静かに答えた。
「悪魔は魔導師が来る前に逃げた」
警護とは、悪魔が再び現れた時に備えて、ということらしい。
ともあれ、こんな状態ではお店を営業できないと、閉店の看板を出すために入口のドアを開ける。けれどそれはすでにドアにかけてあった。
いろいろと皆さんに手伝ってもらってしまい、申し訳なくなる。何かお礼ができないかと考えながら時計を見ると、もう二時を回っていた。甘いものが食べたくなってきて、いい案が浮かぶ。
「シゼさん、ケーキを作ろうと思うのですが、いかがですか？」
「……休んだらどうなんだ」
「私が食べたいんです。ほら、三時のおやつにチョコレートケーキ」
シゼさんはしぶしぶといった様子で許可してくれたので、さっそく取りかかった。

二層のチョコレートケーキをビターチョコレートでコーティングしていく。
この国の子守唄を歌いながら作業していると、あっという間に一ホール完成。
それを切り分けて、シゼさんと向かい合って食べた。濃厚なチョコケーキは、我ながら上出来だと思う。ニコニコしている私の前で、シゼさんは黙々とそれを食べていった。
二つめを食べようとしたけれど、お腹周りがきついと感じて手を止める。いつも通りのコルセットの締め方なのに……
「はっ！　太ったのかしら……」
思わず、ポロッと口に出してしまう。
いつも、ついつい残りもののケーキを食べてしまうし、味見もよくするし、それなのに運動量は以前と比べて減ってしまった。学園にいた頃は授業で剣術や魔法を使った戦闘の練習をしていたけれど、最近した運動といったら悪魔から走って逃げたことくらい。これはまずい。
「運動しなくちゃ……」
「……オレとするか？　剣で」
シゼさんが提案してくれたけれど、腕力の強い獣人であるシゼさんと手合わせすると、私が飛んでいってしまいそうだ。
「……剣はやめておきます」
「なら、散歩でもするか？　精霊の森なら安全だろう。ちょうどオリフェドートに酒をやろうと

思って持ってきている。森を散歩して、陽が暮れたら飲もう」
「それはいいですね。んーでも……」
テーブルの端っこに酒瓶らしきものがあると思ったら、そういうことだったのか。オリフェドートが喜ぶと思う。
でも運動はもう少し手軽にできるものにしたい。
何かないかしら。うーんと唸りながら考えて、思いついた。
立ち上がってシゼさんの隣に立ち、手を差し出す。
「私と踊ってください、シゼさん」
久しぶりにダンスがしたい。一緒に踊りましょう。

2　絆＊シゼ＊

オレは今日一日、魔法治療の副作用で気が緩み切っているローニャの警護をすることになった。
昼すぎに起きてきてから、ローニャは終始ニコニコしていた。心が穏やかである証拠なのだろう。
サンドイッチを作っただけで、はしゃいだような笑みになる。無邪気な少女そのものだ。
こんなに無防備なくせに、よく一人で最果ての街で暮らすと決めたものだ。いくら自立していて、

**立ち読みサンプル
はここまで**

強力な魔法を扱えても、当人がこれではこちらは気が抜けない。
悪魔に狙われているというにもかかわらず、警戒した素振りも見せずにケーキを作ったり、挙句の果てには一緒に踊りたいなどと言い始めた。
オレは少し間を空けてから断る。
「踊りなんて知らないぞ」
昔世話をしていた子どもにせがまれたことはあったが、オレは踊り方など知らない。
「簡単ですよ。お相手お願いします」
ローニャはオレの言うことも聞かずに手を掴んだ。仕方なく腰を上げる。
「左手は私の手を握って、右手は私の腰に当てるんです」
そう言いながらオレの手を移動させて、ローニャが向かいに立つ。腰に手を当ててしまえば、身体が触れそうなほど近い。
「こうして、こうやって、ステップするだけです」
ローニャの言う通りに足を動かす。確かに簡単だが、これで踊っていることになっているのか。
「そうです、お上手ですね。踊れるじゃないですか」
ローニャは変わらずニコニコしている。そうして二人、店の真ん中でステップを繰り返して踊った。足元を見ていたローニャがふと顔を上げ、オレと目を合わせて微笑む。楽しそうだ。それを見て、もう少しだけ付き合ってやろうと思った。